

氏 名	いわ 谷 あや 子
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 301 号
学位授与の日付	平成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	南インドの商業移動民ヴァギリの生活実践と信仰変容 ——ミメシスの文化人類学に向けて

論文調査委員	(主 査) 教授 田 中 雅 一	教授 福 井 勝 義	教授 菅 原 和 孝
--------	---------------------	------------	------------

論 文 内 容 の 要 旨

本博士論文は、南インドを中心に活動するヴァギリと呼ばれてきた人々についての研究である。彼らは狩猟採集と行商に従事しながら移動生活を送ってきた。ヴァギリを取りまく環境は、ホスト社会の政策や他の移動民たちとの競合、不安定な市場動向に左右されやすく、きわめて変動性が高い。彼らはインド社会の底辺に位置し、貧困や差別に曝され、ヒンドゥー教とは言えない独自の宗教文化を維持している。本論文では、そのような状況でヴァギリがいかにして自己と自民族集団を維持していこうとしてきたのか、という問いに答えようとしている。その際、ミメシス（模倣的再現あるいは擬態）という概念を使って、彼らの生活実践と信仰に関する分析を試みた。ミメシスとは、社会で共有されている行為の形式を、「ありそうな仕方」で再現する行為、とここでは定義される。それは弱者による、支配的な生活スタイルや価値の模倣あるいは追従ではなく、主体的に他者と関わる相互行為の技法の一種である。インドの移動民は一般に、ホスト社会から切り離された存在として個別に論じられるか、そうでない場合はホスト社会の価値や行動様式を模倣する存在として論じられてきた。本論文では、ミメシスという概念を使ってホスト社会とヴァギリ社会との動態関係を描こうとしている。なお、本研究はヴァギリとともに暮らしたおよそ2年間の現地調査に基づいている。

本博士論文は上記の問題設定を記した序論（第1章）と結論（第8章）を含む8章、2部構成で展開する。第1部「ヴァギリ社会の多層性」は2章からなり、それらは第2章「複数の名前の狭間で」、第3章「複数の生業と生活戦術」である。第2部「他者が神となる空間」は4章からなり、それらは第4章「神をめぐる言説と儀礼」、第5章「信仰実践としての夢見」、第6章「神の夢の変容 その1：地域の神々との接合」、第7章「神の夢の変容 その2：キリスト教宣教と改宗」である。

第1部では、ヴァギリがおかれているきびしい社会環境を詳述し、それに対して彼らがどのような形で集団を維持してきたのかを考察している。またヴァギリ社会の構造についても紹介している。第2章では、ホスト社会からヴァギリが受けるレッテル（名前）やイメージ、それに基づく諸政策を考察した。第3章では、ヴァギリの生業の複合性とその変遷に焦点を当てている。他者（ホスト社会の成員、出資者、顧客、捕獲する動物）の話し方（動物の場合は鳴き方）や振る舞い、彼らがヴァギリに抱くイメージに沿う形で、ヴァギリは状況に合わせて自己のイメージと販売物を巧みに変える。彼らはネックレスなどの原料となるビーズを北インドまで行って購入し、それを南インドの門前町やゴアなどの観光地で販売する。前者ではその地域のヒンドゥー教徒と、後者では欧米からの観光客とのやりとりを紹介している。

第2部ではヴァギリの信仰実践とその変容について論じている。第4章では、神をめぐる言説やイデオロム、ヴァギリの神あるいは霊概念や儀礼を明らかにした。ヴァギリ社会の特徴は夢を親しい人に語り、その解釈を共有するところにある。「神の夢」として解釈された夢をきっかけに祖先とされるリネージ神への儀礼がなされる。本来私的な夢は共有され、儀礼を通じてより共同的なものへと変貌する。第5章ではその過程を詳述している。重要なことは夢に現れる神は、ヴァギリたちが日常的に接する「他者」の形を取っていることである。つまり、ヴァギリにとっての夢見とは、他者との関係をたえず

作りかえ、調整する空間を提供している。そこには特定の神の「正しい」形象はなく、夢が語られる過程で、神の姿、そして神と人との関係はたえず定義しなおされる。その結果、ヴァギリを脅かす他者（の力）を集団に取り込みながら自らを変容させ、同時に自分たちを維持していくことが可能になる。

第6章では、地域のヒンドゥー教の神々とその祭祀形態（巡礼、呪術）がヴァギリ社会にどのような影響を与えてきたのかについて論じている。ヒンドゥー神の受容は、ホスト社会のヒエラルキーに包含されることにつながる。しかし、ここでも夢見は重要な役割をもっており、ヴァギリ独自のリネージ神（祖先）はヒンドゥーの神として読み替えられているが、その読み替えに、より主体的な関与を認めることができる。第7章は、ペンテコステ派キリスト教への改宗を論じている。ここでは、夢を信仰告白として語ることが大きな意味をもっていた。つまり、ここでも夢の語りを媒介にして既存の象徴体系（リネージ神祭祀）と新しく導入された象徴体系（キリスト教）が接合し、後者の受容が主体的になされていく。

本博士論文では、夢に現れるさまざまな形象を解釈し、それを積極的に受け入れていく過程を、他者との相互行為としてとらえミメシスとして論じている。ヴァギリによるミメシスとは日々生じる自己と社会環境との対立を柔らげ、マイノリティが生存し続けていくための生の技法として理解できる。

論文審査の結果の要旨

岩谷彩子氏の学位申請論文は、南インドのタミル・ナードゥ州を生活拠点とするヴァギリたちを対象とするきわめて質の高い論文である。

この論文の独創性は大きく3つに分かれる。ひとつは民族誌上の意義である。ヴァギリは本来定着民ではなく、狩猟を伝統的な生業とするライフスタイルをとる。ヴァギリはタミル語を母語とする人々が住むタミル・ナードゥ州を主たる活動領域とするが、その言語は北西インドのグジャラート語に近い。ヴァギリは南インドでは余所者なのである。そして、高度に階層化されたインド社会において最底辺に位置する。彼らはしばしば農業労働者である不可蝕民よりも地位が低い存在とみなされてきた。彼らはヒンドゥー教徒と異なり、入浴をしないことで有名である。その生活基盤はきわめて不安定であり、衛生状態なども良好とはいえない。文化人類学的調査の原則は研究対象とする人々とともに生活することである。だとすると、ヴァギリはかなり覚悟のいる調査対象といえる。それだけではない。周縁的な存在と生活をともにすることは、彼らを差別し搾取してきた、土地所有者など支配層に研究者が受け入れられにくいということを意味する。そうした状況において、岩谷氏はヴァギリたちと生活をともにし、彼らと一緒に北インドの各地をめぐる。その意味で岩谷氏の調査は敬服に値するものであり、また従来の民族誌の空隙を埋めるものとして高く評価できる。

2番目はインド社会論に関わる。ヴァギリは伝統的には狩猟・採集を生業としてきたが、政府の野生動物保護などの政策によって、狩猟を主たる生業とすることは困難となっている。代わりに彼らは、ビーズのネックレスや櫛などの小商品を、寺院の参拝者や観光客に販売することで生活している。そのため彼らは商業流浪民と呼ばれる。彼らの生活拠点は南インドだが、安いビーズを仕入れるために北インドにまで足をのばし、また西インドの国際的な観光地ゴアやシンガポールなどでも商売を行っている。岩谷氏の研究はインドという高度に階層化された分業社会における商業流浪民の研究に大きな貢献をしている。

ヴァギリをインドに数あるカーストの一種だととらえることはできない。しかし、それらとの比較を通じて彼らのインド社会での特異性を考察する必要がある。これまでの研究によると、カーストは大きく3種類に分けて論じられてきた。一つは地位の高いバラモン（聖職者）をモデルとするカーストで、清浄など宗教的価値が重視されている。つぎに政治・経済的な力をもつカーストでそこでは土地（村落）を中心とする他のカースト（鍛冶屋などの職人、小作人、農業労働者など）とのネットワークが重視される。最後に、村を越えた広範囲のカースト・ネットワークを維持し、布などを生産・販売する商人カーストである。ヴァギリたちはこの商人カーストに近い存在として理解されてきたが、岩谷氏の研究から明かなように、ヴァギリには構造化された組織というものはない。むしろ小集団ごとに移動し、ときに協働するという臨機応変に対応できるゆるやかなネットワークを通じて販売を行っている。そして、特定のカーストと安定した分業関係に入ることはない。他集団との関係は、販売や資金調達などに限られ、それもきわめて短いサイクルに基づいている。それは流浪民であるという結果とも言えるが、流浪民であっても、土地ごとになんらかの安定した関係を持つことは可能であろう。彼ら

が特定のカーストと関係を持つのを避けるのは、そこから不可避に生じる差別の構造化を恐れ、回避するための戦略として理解すべきである。こうした視点は、実際に彼らと生活し、その販売戦略を理解することで明らかになってくるのである。

三番目の独創性として、社会変化論への貢献を指摘したい。最底辺に位置づけられ、行動範囲が広いため、ヴァギリ独自の生活習慣はさまざまな外的要素によって影響を受け、変化を余儀なくされている。それでは、かれらはどのような形で、変化に適応しているのだろうか。岩谷氏は、ここでアリストテレス以来使用されてきたミメシスという概念に注目する。ミメシスとは模倣や擬態と訳されるが、文化人類学者の M・タウシッグなどは、より創造的な過程を認めている。それは単なる模倣ではなく、積極的な他者との関わり方であるというのである。岩谷氏もまた、こうした視点を踏襲している。そのうえで、外的な要因を理解し、取り込むために夢が独自の役割を果たしてきたことに注目する。岩谷氏は、宗教変化の事例としてホスト社会の宗教であるヒンドゥー教との関係、また長い間改宗活動を続けてきたキリスト教との関係について吟味している。そして、ヴァギリたちの宗教実践の変化は他者の単純な受容によって生じるのではなく、夢に現れるさまざまな予兆を解釈し、それを共有することで、変化の要因となる外的要素をいわば主体的に飼い慣らす営為であると結論した。

以上のように本論文は理論的にも独創性に満ちた一級の民族誌であるという点で審査員の意見が一致した。共生文明学専攻、文化・地域環境論講座は、文明相互の共生を可能にする方策を探求するために創設されたが、その設置目的にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年6月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。